

146. 昭和61年度滋賀県下における発掘調査の紹介

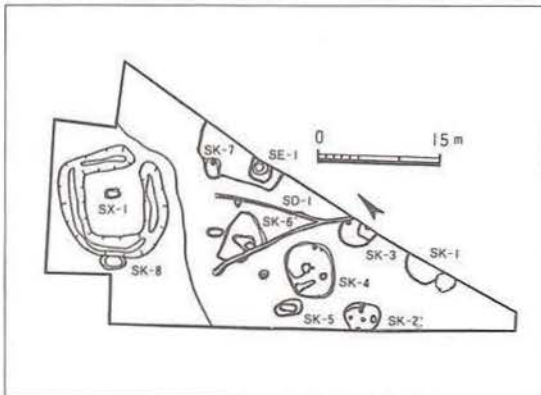
その5

52. 弥生時代中期の玉作り遺跡

守山市播磨田 播磨田東遺跡

野洲川西岸方に営まれる河西ニュータウンは、近年の大規模な開発によって生まれた新興の集落地で、それに重複するように播磨田東遺跡は分布する。当遺跡は縄文時代後期から奈良時代に至る集落跡として周知されているが、昭和54年の調査によって、弥生時代中期～古墳時代中期にかけて形成された竪穴住居群が検出された。そして、特記すべき成果として、玉作り工房を容易に想定できる碧玉、滑石原石やそれを用材とする玉製品、未製品、フレークの多数の出土をみた。

さて、今回の調査は遺跡分布の西辺の目安とされる県道栗東一大津線（琵琶湖大橋取付道路）の西側隣接地で実施した。水田区画を無視し湖岸に伸びる道路のため調査地（地目水田地）は三角形を呈する。耕作、包含土層約60cm下から、土壇9基（SK-1～9）、井戸1基（SE-1）と方形周溝墓1基（SX-1）・溝1条（SD-1）の2時期の遺構を検出し、前者を弥生時代中期末、後者を後期前半の所産と捉えた。土壇からは多数の土器類の他、サヌカイト、流紋岩、アブライトの石製品、未製品の出土があった。流紋岩は



調査平面図

スリ切り工程を経て方体状を呈し、北陸産で、玉製品の用材として搬入されたものと考えられる。

一方方形周溝墓は、極めて緩慢に傾斜し低地化する地形上に築造されている。台状部中位北東偏りに主体部の痕跡がみられ、周溝の4隅は浅化する。現状では1基のみの検出であるが、北西方に向け、墓域としての拡がりか推測される。

以上概要を記したが、今回の調査によって当遺跡の分布が更に西方に拡大することが確認でき、弥生時代後期における集落に関わる墓域に想定できそうだ。今後検証すべきところは多いが、貴重な資料と言えよう。
(守山市教育委員会 岩崎 茂)

53. 古墳時代の集落跡も検出

守山市横江 横江遺跡

滋賀県住宅供給公社の宅地造成に伴い昭和58年度から調査を行っている横江遺跡は、今年度で4年目に当たり、5,500㎡を対象に調査を行った。

今年度はまず第14調査区を設定したが、当調査区では昨年度調査した第13調査区と同様に、溝によって区画された屋敷地と、それに伴う掘立柱建物跡、溝、土坑等が検出された。屋敷地は25m×50mである。当調査区の南東に位置する区画溝は幅3.5m、深さ1mの大きなものである。そしてSB-1、SB-2は礎石を用いている。遺物としては土師皿、黒色土器椀、常滑焼片口鉢、青磁、白磁、土釜、鍋等があり、13C後半～14C初頭のものである。

次に第14調査区に隣接して第15調査区を設定した。ここでは中世の遺構としては素掘り小溝のみであった。第14調査区とは先述の区画溝で分けられており、この区画溝が横江遺跡の中世集落と外部とを画する溝と考えられる。当調査区では、古墳時代前半期の掘立柱建物跡、方形周溝墓(5基)、土壇、溝、ピットと、古墳時代後半期の旧河道を検出した。旧河道からは土師器、須恵器、木器が出土した。

今年度の成果としては、第14調査区で新たに溝で区画された屋敷地を検出したこと、第14調査区と第15調査区との関係で当遺跡における中世集落の境界の一端がおさえられたこと、古墳時代集落の様相がつかめたこと、方形周溝墓を検出したことがあげられよう。

(助滋賀県文化財保護協会 森 格也)

54. 古墳時代初頭の竪穴式住居群

栗東町高野 高野遺跡

高野遺跡は栗東町高野に所在する遺跡である。調査は県道辻一高野線改良工事に伴って実施された。調査対象地は約2,800㎡である。結果は北端に近世以降と思われる辻鋳物師関連の遺構と思われる中央にスラグを大量に包含する方形の土坑をおき、その両側に円形の深さに土坑を同じように取り付けた形の土坑が検出された。当地の中心的時代となる古墳時代初頭の遺構は、素堀りの井戸や溝、竪穴式住居跡が4棟検出された。中でも竪穴式住居は1辺6m～10m、深さ60cm～80cmと大規模なものが多く、中央に浅い土坑を持つ四本柱で南側に壁溝につづき方形の貯蔵穴を持つ。この地方での典型的な型のものが検出された。また、調査区の南端においては11世紀末の黒色土器壺と土師器皿を伴う柱穴群や溝あとも検出した。

(勸励賀県文化財保護協会 木戸 雅寿)



検出された竪穴式住居跡

55. 縄文時代前期の甕棺か？

草津市津田江 津田江湖底遺跡

当遺跡は昭和58年度の水中調査によって発見された遺跡である。樋門建設の事前調査として、今回発掘調査が行われ、縄文時代前期の遺物包含層が調査地全域にわたって確認された。

遺構として顕著なものはいくつか、墓と考えられるものが1基検出された。これは直径2.5mの土坑



朱彩土器の出土状況

内に、小型の壺に浅鉢で蓋をしたものを横置していた。

この遺構の検出地点は62年度に継続して調査を行なう範囲に隣接しており、今後の調査に期待がもてる。この他、若干のピットが検出されたが、つながりは不明である。

なお、当調査地に隣接して2ヶ所で発掘調査が実施されているが、遺物は少量ながらもほぼ同時期のものと考えられる。また、いずれの調査地においても一面に風倒木が見られ、この付近一帯が当時陸化し、森林を形成していたことが伺い知れる。

(勸励賀県文化財保護協会 井上 洋介)

56. 柵・溝に囲まれた建物群検出

草津市下寺 観音堂廃寺遺跡

草津市北部の常盤周辺は、白鳳寺院が数多く所在することで著名であるが、調査でその所在が確認できたのは、花摘寺廃寺、宝光寺跡、観音堂廃寺の3例にすぎない。

下寺町の観音堂廃寺は、二町四方の寺域が確認されている。内部の状況は不明であったが今回、観音堂境内地において調査の機会を得ることが出来たので以下、調査の概略を記す。

遺出された遺構は、掘立柱建物3、柵列2、溝跡2、基壇状遺構1等がある。建物は、ほぼ同位置に重複して建てられており、建物方位は、寺域と同じであり、建物周囲には柵列および溝が巡るものと考えられる。

柱穴内には、四重弧文軒平瓦、平瓦等が根固用に使用されているが創建時の施設である可能性は低い。

基壇状遺構は、版築は施されていないが、比較的固くしまった80cm程の盛土である。盛土内からの出土土器から、当該遺構も創建時のものとは言い難い。

今回は、残念ながら創建時の施設こそ確認することは出来なかったが、寺院の推移を窺い知る資料を得ることが出来、その成果は大きいといえる。

(草津市教育委員会 小宮 猛幸)



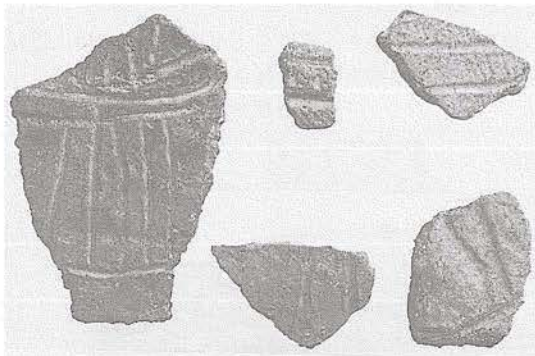
遺構検出状況

57. 標高81.5mで縄文後期の包含層

草津市志那中 志那湖底遺跡(志那北その2工区)

志那湖底遺跡は、草津市志那町地先の湖岸及び湖中を中心とした遺跡である。遺跡の範囲は、数回にわたる滋賀県教育委員会による試掘調査の結果、北は津田江湾の南側より、志那中町地先、志那町地先を経て、七条浦の北側にまで及ぶ南北に長く延びることがわかった。今回の発掘調査は、志那湖底遺跡のなかでも、北側にあたる部分で、志那町の北側、志那中町地先に位置する。昭和61年度の発掘調査では、縄文時代後期を中心とした遺物包含層が検出されており、今回の調査も、昭和61年度の調査を踏まえて行ったものである。調査は、鋼矢板で仕切られた中を掘削するという方法で行った。縄文時代後期の遺物包含層は、標高81.5mのところで検出された。包含層は、砂礫層から成っており、厚さは平均で30cm程である。出土した遺物は、縄文時代後期を中心とした土器である。遺物整理が行われていないために、土器の具体的な型式名は不明であるが、縄文時代後期中葉にあたる北白川上層式が大半であった。しかし、なかには、大阪府堺市四ツ池遺跡で出土している、四ツ池式と呼ばれるものに類似する土器も数点出土している。土器の残存状態は良好であるが、完形品となるものはなかった。また、遺構面と考えられる層からは遺構は検出されなかった。昭和60年度でも遺構は検出できなかった。設定したトレンチの中で、遺物包含層を検出した面の高さを計測してみると、いずれも湖中側が高く、湖岸側が低いという値が取れた。このことは、湖中側に高まりがあり、この高まりに生活跡を伺わせる痕跡があるのではないかと考えられる。

(勸滋賀県文化財保護協会 奈良 俊哉)



出土した縄文式土器

58. 溝内より多量の瓦片出土

草津市志那中 志那湖底遺跡(志那北その2(Ⅲ)工区)
志那湖底遺跡については、昭和60年度に発掘調査が

行われており、今回の調査も、この調査を前提として行った。今回の対象地区は、志那中町地先の湖岸で、津田江湾の南側にあたる部分である。

昭和60年度の発掘調査は、湖岸堤部の北側に隣接する堤脚水路部分について行った。今回は、湖岸堤部についての発掘調査である。発掘調査は、鋼矢板で仕切られた中を掘削し調査を行うという方法で、標高82m付近まで掘削した。この中で標高83.5m付近で遺物包含層が検出され、弥生時代中期から近世までの遺物が出土した。この遺物包含層の上面は、現在の湖底面と一致しており、遺物も磨滅が著しいものであった。しかし、この包含層を約10cm程掘削した後に弥生時代中期と、古墳時代中期から奈良時代までの溝をそれぞれ一条づつ検出した。この遺構が検出された面は遺物包含層と同じ砂層から成る面であった。この2つの遺構は湖岸から湖中に向う溝で、途中交差し、切り合うものである。切り合いの関係は、古墳時代中期から奈良時代までの溝が、弥生時代中期の溝を切っているという関係であった。

出土した遺物は、土器の他に木器及び石器も多量に出土している。特に弥生時代中期の溝からは、石包丁や石鎌・石斧などが出土し、古墳時代から奈良時代までの溝から平瓦が多量に出土した。

昭和60年度及び61年度の調査より、検出された溝からの出土遺物の状態などから、付近に、しかも湖岸側の田地に、弥生時代中期から奈良時代までの集落跡があるのではないかと考えられる。

(勸滋賀県文化財保護協会 奈良 俊哉)

59. 多量の土器と土器棺墓等検出

草津市志那 志那湖底遺跡(志那南その2工区)

当遺跡は昭和56年度以来、相次いで調査が行なわれているが、今回の調査地点は遺跡の南限である葉山川に近く、内湖である平湖を形成する自然堤防上に位置している。調査対象面積は約1,800m²であった。

現地表より1.5m程度下がった標高83.5m付近にお



遺跡全景

いて茶褐色腐植土層が検出され、この層からは木器数点が出土した。現在のところ、これらの木器の年代等については明らかにしえない。

これより下層においては、標高82.7mで縄文時代晩期の良好な包含層を検出した。包含層下には当時の生活面も確認され、東南より西北に伸びる自然堤防状の砂堆上を中心に、当時の人々は生活を営んでいたらしい。

検出遺構としては、土器棺墓2基をはじめ、土壇やピット群があげられる。土壇については土器棺墓とはほぼ同時期の土壇墓群の可能性が考えられる。ピットは径20～30cmのものが主体であるが、残念ながら住居跡として明確にすることはできなかった。

今回の調査で出土した縄文土器はコンテナ約50箱であるが、その全てが晩期前半（滋賀里Ⅰ～Ⅲ式期）のものであり、まとまった資料として貴重である。また、昭和59年度に沖合い400mの地点を調査した際にも、ほぼ同時期の土器棺墓群が検出されており、付近一帯が当時の生活跡であった可能性を有する。

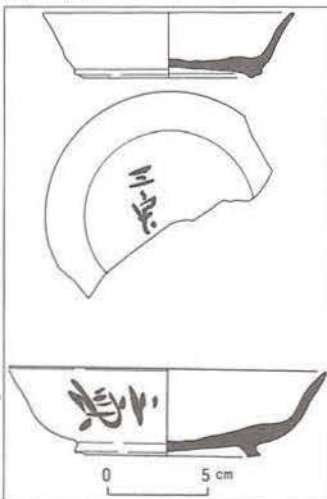
(勸業滋賀県文化財保護協会 井上 洋介)

60. 「三宅」「三雲」の墨書土器出土

草津市矢橋 北葦遺跡

北葦遺跡は草津市矢橋町地先に位置する遺跡である。北川下流の浜街道以西一帯に広がり、東は御倉遺跡と接している。本年度の調査は、BⅣトレンチ・Aトレンチ・BⅡ-1トレンチ・BⅢ-1トレンチについて行われた。遺構はAトレンチで地表下1.8m、他では2.5mを測る所で上層遺構面が検出され、下層遺構面はそれぞれより0.3～1m程度下から発見されている。Aトレンチを除く各トレンチからは、連続する形で旧河道が2条と土坑が数十基検出された。Aトレンチからは、溝・柵列・土坑と旧河道が検出されている。

遺物は縄文～鎌倉時代の土器を初めとして、木器・石器・土製品・古銭等が出土した。土器は古墳時代のもものが中心であるが、「三宅」「三雲」と読める墨書土器も発見されている。木器では、齋串・下駄・曲物等、石器では、石鏃・有孔円板・珧状耳飾などが見



墨書土器

られる。また、古銭は饒益神宝と万年通宝を除く10種の皇朝十二銭が確認された。特に県下ではあまり出土例のない珧状耳飾は、完形品（滑石製）と半分欠損したもの（玉髓製）の2点が出土している。

北葦遺跡での遺物は、多量にしかもそのほとんどが砂層から出土しているにもかかわらず完形品が多く、摩滅を受けているものがあまり見られない。砂層が北川の氾濫による流土の堆積作用の結果であると考えられるならば、当遺跡よりあまり遠くない上流域のどこかに、これらの遺物を生み出した人々の拠点となるべき遺跡が存在するものと考えられる。

(勸業滋賀県文化財保護協会 三宅 弘)

61. 共鳴槽を持つ琴出土

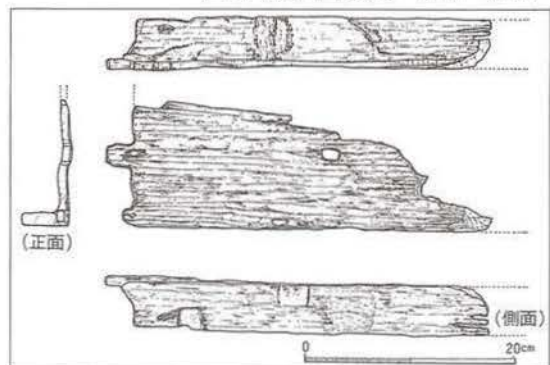
草津市中沢 中沢遺跡

今回、民間マンション建設工事に先立ち調査を実施した中沢遺跡は、草津駅の北を流れる葉山川が形成した微高地上に立地する弥生時代～平安時代にかけての集落跡である。

調査の結果、集落の検出には至らず、弥生時代後期の自然河川等13条の他、時期不明の土壇、柱穴を検出したにとどまった。水路内からは、直径3～5cmの杭を胴木間に多数打ち込んでつくった「しがらみ状」の堰が二基検出された他、多量の土器および木製品が出土した。木製品のうち注目されるのは、琴であり、守山市服部遺跡出土の琴と同じく、共鳴槽を持ついわゆる「構造琴」に属する。服部遺跡例のものと比較した場合、その構造において①竜角部の突起に弦をとめるための穿孔が施されている。②弦を張る板の部分と側板が、一語につくられており、かつ、その接続部分の角度が直角である等の違いを認めることができ、むしろこの構造は、正倉院御物の和琴のそれに類似することが指摘できる。

特殊な遺物を持ち、高度な土木技術を有す中沢遺跡に対する今後の調査研究に托された課題は大きい。

(草津市教育委員会 小宮 猛幸)



和琴実測図